

天竺
巡礼



目次

歓喜の書

古田紹欽

1

キャプション・地図

6

うた／写真

8

人縁深く——あとがき

88

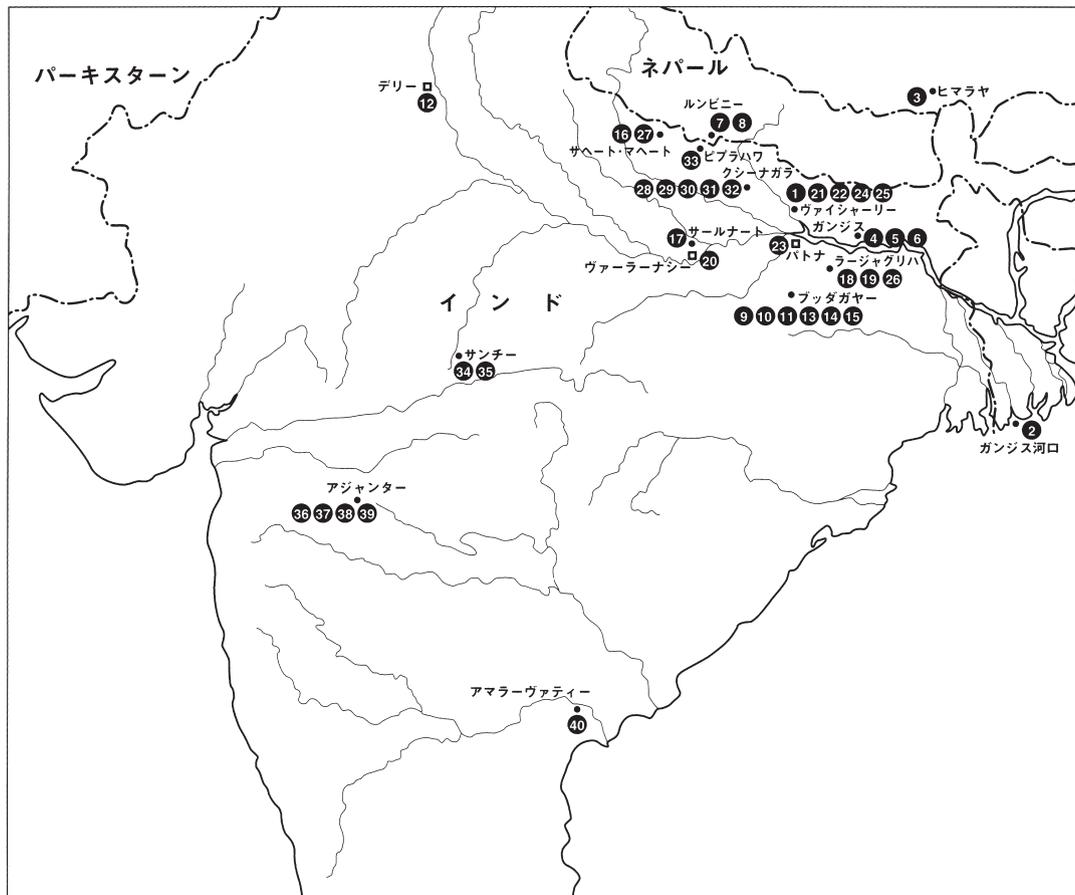
再版によせて

長沼正光・瑞子

92

カット 著者

- | | |
|---------------------------|---------------------------|
| ① ヴァイシャーリー古城址の落日 | ②4 ヴァイシャーリーの池畔 |
| ② ガンジス河口俯瞰 | ②5 ガンダキ河畔の湖 |
| ③ ヒマラヤのロールワリン山群 | ②6 ナーランダー学問寺の遺構 |
| ④ 暁のガンジス河 | ②7 サヘート・マヘートの村道 |
| ⑤ 雨季のガンジス河 | ②8 鍛冶工チュンダの村 |
| ⑥ ガンジスの中洲 | ②9 クシーナガラへの道 |
| ⑦ ルンビニーのアショーカー王石柱 | ③0 ヒラニヤヴァティー河 |
| ⑧ 釈迦誕生のルンビニーの樹下 | ③1 クシーナガラの大涅槃寺 |
| ⑨ ブッダガヤーの大菩提寺 | ③2 大涅槃寺の佛陀涅槃像 |
| ⑩ 釈迦成道の菩提樹下の佛陀像 | ③3 カピラヴァストゥの田園 |
| ⑪ 泥中に咲く蓮華 | ③4 サンチーの丘に遺る佛塔の欄楯と僧房址 |
| ⑫ ガンダーラの塑像の佛頭・5世紀 | ③5 デカン高原のサンチータ景 |
| ⑬ スジャーターの村から望む前正覚山 | ③6 アジャンター石窟群遠望 |
| ⑭ 乾季の尼連禪河と前正覚山 | ③7 アジャンター第19窟外壁の佛陀像 |
| ⑮ スジャーターの村と乾季の尼連禪河 | ③8 アジャンター第1窟内壁の舎衛城神変図 |
| ⑯ マンゴーの林 | ③9 アジャンター第26窟側廊の涅槃像 |
| ⑰ 釈迦初転法輪の聖地鹿野苑 | ④0 クリシュナー河流域のアマラーヴァティー大塔址 |
| ⑱ 王舎城に聳える霊鷲山 | |
| ⑲ 霊鷲山山上 | |
| ⑳ ヴァーラーナシー払暁のガンジス河ガート | |
| ㉑ ヴァイシャーリーの佛塔とアショーカー王柱獅子像 | p. 2 ブッダガヤーの菩提樹下 |
| ㉒ ヴァイシャーリーの村 | |
| ㉓ 乾季のガンジス河遠望 | p. 91 ガンジス河の帰帆 |



身の裡うちに消ゆることなき声一つ「人は土にて造られしもの」



1 ヴァイシャーリー古城址の落日

高空^{かうくう}を飛ぶ視野にして限りなく岐^{わか}れし恒^{ガン}河^ガのデルタが浮かぶ

密林の枝みゆるまで低^{ていくう}空を飛びて古代の都市に近づく

雨雲の切れしたまゆら高空の雲みゆすでに夕べの光

夜の岸にみえわたる海^{いさりび}漁火の沖はひかりの彼岸のごとし



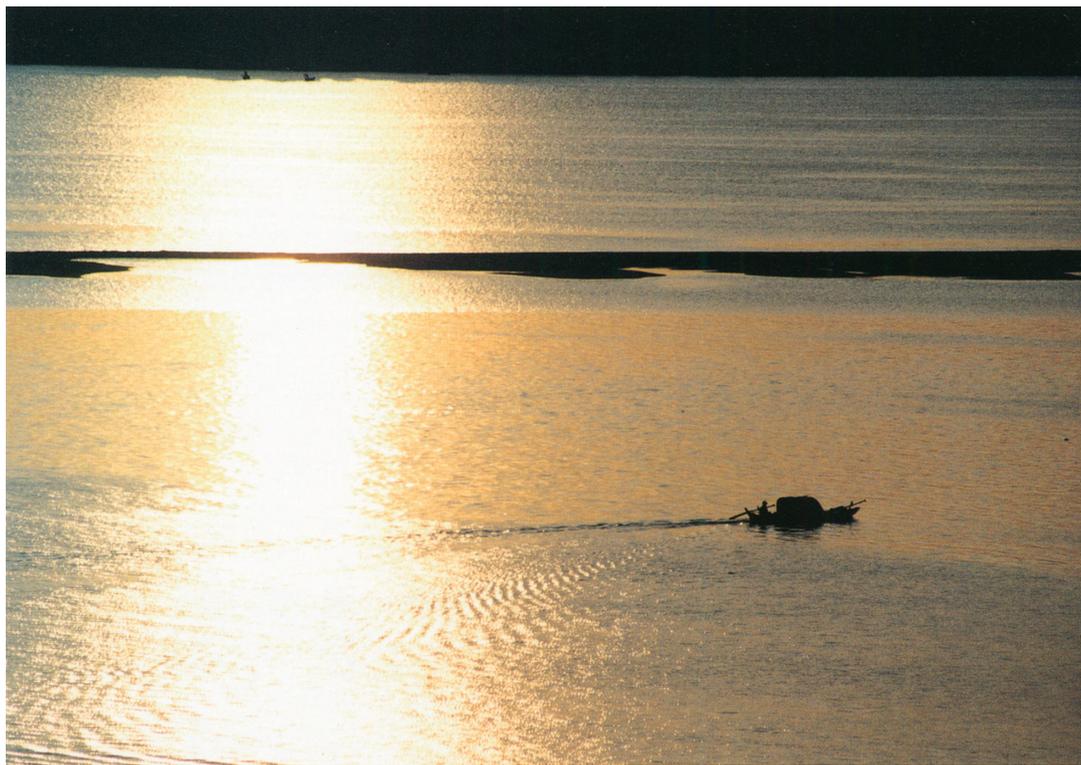
2 ガンジス河口俯瞰

灯を消して眠りたる村川岸にありて音なく恒河は流る

水脈を曳く舵みゆ漁にいつる舟川金色に輝きながら

大河に網打ちし人手繰りゆくときの間心つつましからん

ガンジスの彼岸にひくく朝の日のなほ輝きとならぬくれなる



4 暁のガンジス河

人縁深く——あとがき



インドに初めて出かけたのは、昭和四十四年の暮であった。以来、三十年近い歳月が経った。その間、二度、三度と巡礼の旅は重なり、短い期日ながら、インド佛跡巡礼は十数回におよんだが、最初の旅の衝撃は、いまだにうすれることはない。

ルンビニーへの道は難路で、帰りは深夜になった。曠野の路傍にあった村の茶店にバスを停めた。電灯はなく、広場に火を焚いて、その火を囲んで粗末な木の長椅子がおかれていた。バスを下りて焚火の傍へ寄ると、椅子に腰をかけていた男たちがつきつぎに立った。そのとき、わたしの前にいた若者が立ち上がりざまに、肩に掛けていた広い肩掛けで、自分の坐っていた後を払った。一瞬のことであったが、その所作は、わたしが長い間忘れていたものを思い出させた。その瞬間が今も折々胸に浮かんで、わたしの驕りの心をしずめてくれる。

チュンダの村を訪ねたときは、行く手に山羊が歩いていた。そこへ飛来した一羽の鴉が、羽を大きくひろげながら山羊の背に止まった。鴉は山羊の背で羽をたたみ、山羊は驚くようすもなく、鴉を背にしたまま歩いて行く。その光景に、インド数千年の精神の歴史のふかさを垣間みる思いがした。

ヴァイシャリー村にも電灯はなかった。藁葺きの土の家には、入口だけが開いている。

その奥にかまどがあつて、牛糞を平たく干し固めた燃料が、四、五枚重ねてあるのが外からもみえた。家の前は固いたたきで、土の上に粃がうすく干されている。その一角で家族が木の臼で粃を搗いていた。臼を搗く女たちがはにかむ。その含羞も忘れかけていたものであった。檻褌に近い垢衣であつたが、人間のほんとうの美しさを見たように思った。子どもがしゃがんで、搗き上がった米を篩にかけている。米と糠を木の鉢に分けて盛つてある。庭の隅に米粒がまかれているのは、小鳥のためであつた。朝早く村を行くと、どの家の前も掃き浄められて、土の上に穀粒がまかっていた。

「インドは不思議な国ですね」と、医師の長沼先生はよく口にされる。「もう疲れて、二度とこんな旅はすまいと思つて帰つてきても、十日もすると、また行きたくなくて——」と。「あの貧しい人たちが、ものを分かち合う、貧しいものが満ち足りた顔をしている、あの表情はどこからくるのでしょうか」と言われる。先生ご夫妻とは、昭和五十四年のブータンの佛跡巡礼以来、毎年のように一緒に旅をした。先生は旅先で本を求められるたびに、「扉に記念の歌を」と言つて、さし出される。わたしが歌誌の『歩道』へ出す歌をずっと休んでいたところで、折々の旅のうただけが、旅先で求められるままに先生の手もとに残つた。ある時、瑞子夫人がそれをコピーして送つてこられた。歌集にまとめたいと言われたが、うたは少なかつた。そのままにして数年たつたが、この秋に、またその話が再燃して、「写真を入れて、うたと合わせた本にして、知己に配りたい」と言われる。

「長年のわたくしどもの『精進』として出版したいし、またこれがご縁になって、インドを慕う人が一人でも出てきたらと願っています」と言つてこられた。わたしがことし還暦になつたことを知られると、その慫慂は急迫で、年内に作りあげたいと印刷所の方へも直

接電話がかかった。十一月に入ると、長沼先生は長年私淑してこられた古田紹欽先生にどうしても序文を書いてもらいたいと、瑞子夫人とともに益田から上京されて、出光美術館にことし八十六歳になられる古田先生を訪ねられた。

古田先生は、わたしにもご縁があった。ことし三十三年目になる鎌倉円覚寺での在家佛教協会の坐禅会には、当初から先生に出講していただいていたし、在家佛教協会にわたしが勤めるようになったのも、古田先生の夜の講座の「臨濟録」を聴きに来ていて、協会の事務局で、偶然、恩師の増谷文雄先生に出会ったのが縁であった。当時、増谷先生は東京外国語大学におられたが、『在家佛教』誌の編集の責任者でもあった。そのことも、そのとぎに初めて知った。

人縁の深さはさらにつづいて、在家佛教協会に勤めてから、生涯の師となった理事長の加藤辨三郎先生にめぐり会った。それが長沼先生ご夫妻と出会う縁の端緒であった。

すでに、加藤先生も、増谷先生も亡く、『歩道』の主宰であった佐藤佐太郎先生も、幽明境を異にしている。

わたしの初めての本にさせていただく『天竺巡礼』が、長沼正光先生と瑞子夫人の手によって編まれ、いま出版を目前にしているのは、わたしには夢のような出来事である。その夢の中に、わたしが六十年の人生で出会った方々が、つぎつぎと顕ち現われて、わたしはただその前に頭を垂れるほかない思いでいる。

平成八年十一月

内藤 喜八郎



再版によせて

「還曆に近づきてわが知りそめし命の不思議朝のめざめは」先生からこのお歌を頂いて、当時願っておりました『天竺巡礼』の出版の歡びが叶い座右の書の一冊に加えて既に十四年。徐々に知人にお差上げして喜んで頂きこの度私の手許に無い事に気づき、再版を思いたった次第でございます。

顧みますと初めての海外の旅を私共は、在家仏教協会ご主催のインド仏跡巡拝でさせて頂きました。当時各々四十九才と四十二才の私共は、ご同行の故加藤辨三郎先生ご夫妻をはじめ今は殆ど鬼籍の方となられた会員のお方々から「よくその若さでこの旅に参加されましたね」とほめて頂き面倒をみて頂きました。あの頃はそういう時代でしたね。以後丁度四十年を経た今日この頃溢れるように思い出が尽きません。内藤先生ご夫妻にご縁を頂きそのお人柄、学識と信仰の深さに感じ入りインドをはじめ世界中の仏跡巡拝のおせわになりました。

平成元年南インド巡拝でサンチーを拝しました時、一行は各々古代の礎石に腰かけたり立ち上がったたり、広い周辺を眺め廻し語らいながら落日を待ちました。雲間から太陽が姿をみせた瞬間、その余りの美しさと神々しさに一同無言の時をもちました。——この旅の帰途の機内で私は持参していたサンチーの参考書に記念にと、先生にお歌の所望を初めて

いたしました。「サンチーの丘に沈みし寂円の入日偲ばん末期の時も」これを拝誦して機内で私は何故か涙が溢れて暫く止まりませんでした。それは悲しみでもなく喜びでもなく唯無色透明な純粹な感動としか表しようのない涙でした。先生は天性の詩心をおもちで感性も豊かなお方だとこの時以来感銘一人でおります。その後の事はこのご本の「人縁深く」にお記しのとおりでございましたね。

エレファンタ島からの帰路の船上で思わず合掌した夕陽、インド人のガイドさんも真剣に合掌していました。パガンのサンセット。敬虔な祈りのみで去り難かったたそがれのアンコールワット。イスラエルの丘に坐して宗教談義の折の落暉。幾度も拝した霊鷲山の感動の日の出。ベナレスの拂曉のガンガの体験。チュンダの村の朝靄の中で突如として出遇った吟遊詩人の姿と吟誦に、中世のインドかと錯覚した夢のような体験等々。何故私共は太陽の昇る朝と太陽の沈むたそがれ時に特別な感動を覚えるのでしょうか。「サンチーの丘の上で落日のひとつときを共にできました幸せを家内共々想い出しては歓びに浸っております。」これは平成十九年八月に先生から拝受したお手紙の一節。サンチーの落日はその都度天候と旅程の時間の都合次第で、平成元年のあの時のようにすべての条件が揃った場面には滅多に遇えないのですとおっしゃった事を思い出し、改めて貴重な幸せな時をもたせて頂いたのだったと私共も感謝の一語に尽きます。

「みどりこ嬰兒の初秋の身丈看る如く服を編む妻真夏の日々に」私共の初孫誕生の祝に奥様が真白な毛糸のベビー服をお贈り下さった時に添えられた先生のお歌です。又「かなき奏木」と名づけた長女の娘には二字の漢字をお使い下さり、清々しいお歌を色紙に認めて下さいましたね。加齢と身辺の諸事情で私共は仏跡巡拝を諦める年月を経ましたが、好きなお国の一つら

オスは一度しかお参りしておらず平成十八年春『在家佛教』誌上にご企画を拝見、これが最後と思いつて参加。十四年ぶりのラオスは電化その他でずい分変わったと初日は思いましたが、幼児から大人までその心の中はこの地球上に二つとないみ仏の里の人々である事を実感。三帰依文を唱えられる先生奥様の久しぶりのお姿はかつての黒いおぐしが銀髪に変わられ、永年協会にお尽くし下さった証しを拝む思いでした。

私共は縁あつてこの益田の地に精神科病院を開業して五十三年めを迎えました。当初から三十数年位は不馴れな家業の雑役婦として私は苦痛の時も多々ありましたが、異国の仏跡巡拝の歓び即先生ご夫妻のご温情に支えられて生かされて参ったのが事実です。近親者や他人様から不本意な言動を受けましても内心の立腹や怒りを顔に出さずに生きる忍従の日々でした。それがいつの頃からか自ずと立腹や怒りが湧かない己に気づきました。立腹や怒りは私の驕りの心のなせる結果だったのでは？ 快い挨拶や言動をもらえないのは私にそれに値するすなおさがなかったのでは？ と思うようになっていました。これは先生ご夫妻と仏跡巡拝の折に聴かせて頂いた多くのお話の累積のお蔭様と気づかせて頂きました。もし私がつと早く寿命が終っていたら怒りだけを抱いて逝ったかも知れません。八十二才という寿命を頂き無意識に怒りを忘れてしまい衷心から唯歓びと感謝の念を頂けるようになりました事は、私にとって無上の幸せでございます。

夫の正光はよく申します。「もう一度でよいからインドにお参りしたいな。内藤先生ご夫妻にご一緒して頂けたらこんな幸せな事はない。」でもその直後必ず申します。「お釈迦様のおことばどおり人は生老病死から絶対免れられない。現に先生ご夫妻も自分もお前も病を背負っているからな」と。そして「ずい分と先生ご夫妻のお伴で有り、難い旅をさせて

頂いたな。せめて『天竺巡礼』を再版して有縁の方に喜んで頂ければこれ以上の欲は言う
まら」と。

何れはお釈迦様のお涅槃の世界に逝かせて頂く私共ですが、その時までには幸せをかみし
め感謝一杯の心で寿命を頂いて参ります。

「菜の花に風と光のわたりゆく美^{うま}しのインド永久^{とわ}に忘れじ」 幼く拙い歌でお恥ずかしい
ですが敢て記させて頂きました。

内藤先生、順子奥様、ありがとうございます。一病息災で又おあいできます日を楽しみ
にいたしております。

なお、『天竺巡礼』の再版に当り、大隅直人編集事務所の大隅直人様はじめスタッフの皆
様に、万全のお心配りを頂き立派にここに完成をみました事をこの場をお借りして心より
お礼申し上げます。

合掌

平成二十二年十月佳日

長沼 正光 八十九才

瑞子 八十二才 記す

天竺巡礼
〔新装版〕

二〇一〇年十一月一日 発行

著者 内藤 喜八郎

〒二四〇一〇〇一一
神奈川県横浜市保土ヶ谷区桜ヶ丘二丁目五番十七号
電話 〇四五―三三一―三三五―

発行者 長沼 正光

長沼 瑞子

〒六九八一〇〇四一
島根県益田市高津四丁目二十四番十号
電話 〇八五六―二二―八七二三
ファクス 〇八五六―二三―〇一八五

製作者 大隅 直人

装幀者 加藤 恒彦

組版者 中島ゆかり

印刷所 共同印刷工業

製本所 藤沢製本